

昨日は二十四節気の「夏至」でした

6月22日(月)

昨日は1年で最も昼が長く、影が短い日である「夏至(げし)」でした。太陽が真南に来る南中の時の位置が1年で最も高くなるため、影の長さは1年で最も短くなります。昼が最も長く、夜が最も短い日でもあります。二十四節気は期間をあらわす場合もあります。その場合、今年の夏至は6月21日から7月6日です。ここでは夏至の時期について、「梅雨晴」や「半夏生」などのキーワードをもとに詳しく見ていきます。二つの意味がある「梅雨晴」「梅雨晴」には二つの意味があります。一つは「梅雨が明けたあとに晴れること」。もう一つは「梅雨の期間中に、一時的に晴れること」です。本来、梅雨晴は「梅雨が明けたあとに晴れること」の意味で使われていました。しかし、次第に「梅雨の期間中に、一時的に晴れること」という意味でも使われるようになりました。幕末の1867年に生まれ、俳句革新運動を導いた正岡子規に次の一句があります。～梅雨晴やところどころに蟻(あり)の道～ 正岡子規はこの「梅雨晴」を「梅雨の期間中に、一時的に晴れること」の意味で使っています。「うっとうしい梅雨の時期だけれど、今は雨がやんで、晴れている。外に出てみると、ぬれた地面の上に蟻の行列ができていますよ」こうした心情を正岡子規は五七五に詠んだのでしょうか。

近年、英語教育の重要性が叫ばれています。新たな英語教育のための改革とその背景として、グローバル化の進展の中での英語力の重要性が以下のように述べられていました。急速なグローバル化の進展の中で、一人一人にとって、異文化理解や異文化コミュニケーションはますます重要になり、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要です。現在、学校で学ぶ児童生徒が卒業後に社会で活躍するであろう2050年頃には、日本は、多文化・多言語・多民族の人たちが協調と競争する国際的な環境の中にあることが予想され、そうした中で、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定されます。現行の学習指導要領の基本方針においても、小中高を通じて、コミュニケーション能力を育成し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成することを目指しています。基本的考え方や概要については、次の通りです。

○小中高を通じて、コミュニケーション能力を育成。言語や文化に対する理解を深める。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成する。

○指導語彙を充実(中高を通じて2,200語から3,000語に)また、第2期教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)による英語力の目標は以下の通りです。

①中学校卒業段階：初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。（英検であれば3級程度以上）

②高等学校卒業段階：英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。（英検であれば準2級～2級程度以上）益々重要度を増す英語教育ですが、授業改善やALTの効果的な活用により、英語の授業の充実を図り、3年生卒業時には50%以上が英語検定3級以上を取得するよう取り組みます。

※例えば市内中学生のスピーチコンテストや3年生英検チャレンジ事業の取り組みなどもそうです。

